

【勝見部長】

それでは、定刻となりましたので、ただいまから第13回江戸東京きらりプロジェクト推進委員会を開会いたします。

本日は、16名の皆様全員に御出席いただいております。委員の皆様、誠にありがとうございます。

私は、会議の事務局を務めます産業労働局企画調整担当部長の勝見でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

議事に入る前に、本日の会議資料につきまして御説明をいたします。本日の会議は、これまでと同様、ペーパーレスで行います。会議資料は、基本的にお手元のタブレットやテレビモニターに表示をしています。画面の切替えにつきましては事務局が一括して行います。もし端末に不具合が生じた場合などは、お近くの事務局職員にお声がけください。

それでは、次第の知事挨拶ですが、本日、知事は欠席となりましたので、開会に当たりましての知事からの御挨拶、産業労働局長の坂本が代読いたします。

【坂本局長】

産業労働局長の坂本でございます。小池知事からのメッセージを預かっておりますので、代読をいたします。

本日は、お忙しい中、13回目となる江戸東京きらりプロジェクト推進委員会に御出席いただき、誠にありがとうございます。

今年度から新たにセーラ委員、富川委員、富永委員、西浦委員、御手洗委員に御参加いただくことになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年からの感染症で、世界は厳しい試練に直面しました。この間の事業者の皆様の大なる御協力に改めて感謝申し上げます。引き続き皆様と基本的な感染防止対策の徹底を共有しながら、経済の再生、希望ある未来につなげていければと思っております。

きらりプロジェクトのモデル事業者の皆様は、コロナ禍においても工夫を凝らし、独自の取組を進めていらっしゃいます。きらりプロジェクトでは、江戸から受け継がれてきた技や知恵、美しさ、おいしさといった東京の宝物を、豊かな生活を彩るものとして国内外に発信をしてきました。まさに今、DXの進展、世界的に関心が高まる気候変動や環境問題など、人々の意識やライフスタイルは大きく変化しております。

こうした変革の時代だからこそ、輝く知恵が江戸からの伝統にはたくさん詰まっています。コロナを乗り越えた先に、東京が誇る伝統と革新を磨き上げ、持続可能な成長、サステナブル・リカバリーにつなげていきたい、この新たな時代にプロジェクトの積極的な展開を図ってまいりたいと考えています。

また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は、約1か月にわたり熱戦を繰り広げ、世界中に勇気と感動を届けました。

オリンピックの閉会式の前日、8月7日には、友好都市であり次期大会開催都市であるパリ市のイダルゴ市長と共同宣言を発表しました。ここでは、新しく工芸・デザイン分野を追加し、一層連携を深めることとしております。

こうした一連の動きを踏まえ、本日は委員の皆様、きらりプロジェクトのさらなるブランド力の向上に向けた御議論をお願いします。その上で、これからの海外展開についても御意見を賜りたいと思います。

本日も活発な御議論を期待しております。どうぞよろしくお願いいたします。

令和3年11月2日、東京都知事、小池百合子。代読、東京都産業労働局長、坂本雅彦。

ありがとうございます。よろしくお願いたします。

【勝見部長】

それでは、この後は大洞委員長に議事の進行をお願いいたします。委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

【大洞委員長】

大洞でございます。今日もよろしく申し上げます。

今日は、新しい委員の方がいらしておりますので、まず御紹介からと思っておりますが、私のほうでお名前を呼ばさせていただきますので、簡単に自己紹介をお願いします。

まず、セーラ・マリ・カミングス委員です。

【カミングス委員】

皆さん、こんにちは。今日、お誘いをありがとうございます。とてもうれしいです。オリンピックも盛大に開催できて、おめでとうございます。長野からずっと楽しみにしていました。

でも、去年、アメリカにいたので、コロナが発生して、去年でしたら日本にいなかったから、ありがたかったような感じでもあります。

でも、今日、皆さんと一緒に新たなスタートができることをうれしく思っています。これまで20年以上、酒屋の世界にいろいろ勉強させていただきまして、桶の復活や、傘づくりとか、風呂敷とか、傘とか、いろいろ重なって、今日、誘ってくださってありがとうございます。ますます頑張りたいと思いますので、一緒によいものをつくり続けたいと思います。

【大洞委員長】

ありがとうございます。

では、次に富川匡子委員です。

【富川委員】

初めまして、ハースト婦人画報社の富川と申します。私は、今2017年から今年7月まで婦人画報の編集長、その前は2013年から美しいキモノの編集長を務めていました。なので、染織文化を含めて、伝統工芸についてはいろいろと勉強させていただいております。その中で得ました、小さな小さな知識ですが、そういったものがこのプロジェクトに生かすことができたらいいなと願っております。

今日は、江戸東京きりぎりプロジェクトの名前に敬意を表しまして江戸小紋を着てまいりました。御縁起柄のだるまさんですので、後でじっくり御覧ください。ありがとうございます。

【大洞委員長】

はい、ありがとうございます。

では、次に富永愛委員でございます。

【富永委員】

モデルの富永愛です。私は、ティーンエージの頃から海外に出ておまして、そのときに、自分があまりにも日本のことを知らなくて恥ずかしい思いをしたことをきっかけに、日本の文化に興味を持つようになりまして、個人的に勉強をしてきました。

今、お隣に美しい着物を着ていらっしゃる方がいらっしゃいますが、私自身、着物も大好きで、私の日本の文化に対する興味は、着つけを習うことから始まりました。それでいろいろなことに興味を持っているところでありまして、今回このようなすばらしい委員会に委員として参加させていただくことを、大変光栄に思っております。まだまだこれから学ぶことも多いと思いますし、この場をお借りしていろいろ学ばせていただくとともに、自分の経験をここで生かすというか、お力添えができることができたら、とても光栄に思います。よろしくお願いいたします。

【大洞委員長】

ありがとうございます。

では、次に西浦みどり委員です。

【西浦委員】

こんにちは、西浦みどりでございます。本日は、大変楽しみにこちらに参りました。東京都との御縁は、遡れば30年前に、東京在住外国人の方からヒアリングをするという委員会の総司会の依頼を

受け、マルチリングアルで実施したというのが、わたくし初の都との関わり合いです。その後、ご支持いただいてきた経済界の重鎮たちも小池百合子さんのファンということで一緒に応援してきました。見事、都知事に選ばれその後のご活躍も目覚ましいところです。小池知事とはテレビ東京時代に、彼女が人気ニュース番組「ビジネスサテライト」のメインキャスター。私は毎週土曜朝のインタビュー番組司会アシスタント。総理府提供の番組でしたが、朝と夜の顔という感じで、局の会長にお鮎をご馳走になったりで、3人の会食は楽しいものでした。

それで、今回、江戸東京きらりということ、日本の伝統文化芸術の発信は今までも推進してきましたので任命いただき嬉しかったです。最初に申しますと、私は12歳半のときからイギリスに渡り、成人した後までイギリスで育ちましたので、逆に日本のことに大変興味があり、大好きなのです。自分なりに吸収して日々の暮らしにも取り入れてまいりました。

そして、帰国後、松竹永山社長からお誘いいただいた初仕事が歌舞伎国際広報です。海外のVIPの方が来日されたときに御案内して貴賓室で御説明、一緒に鑑賞する大役です。歌舞伎は大好きで、数年前も、お茶の水女子大学の客員教授をつとめていた際に学生たちを募って歌舞伎に連れて行きました。日本育ちでも歌舞伎を観たことがない！という学生が多かったのです。

これに衝撃を受け、若い人たちに和の喜び、美しさを広めなければと考え、「25ansヴァンサンカン」という女性誌でアール・ド・ヴィーヴルの一環として日本料理、和の器、焼き物塗り物ですね、それらの決まり事や配膳の仕方、季節の行事といったことを楽しく暮らしに取り入れることを啓蒙普及する連載をしました。具体例の写真、執筆を通してメイド・イン・ジャパンを応援して伝えていったのです。

今回は、江戸ということ、私も東京生まれでございますので、非常に力が入っております。まだまだ知らないこともたくさんあると思いますので、逆にここにお集まりの江戸文化を実践し継承していらした方々からも教えて頂ければ嬉しゅうございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【大洞委員長】

ありがとうございます。

最後になりました。リモートで御参加されている御手洗瑞子委員です。

【御手洗委員】

気仙沼ニットイングという会社をやっております御手洗瑞子と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まず、本日はリモートにて失礼いたします。私は、宮城県気仙沼市で手編みのニットの会社を震災後に立ち上げ、経営しております、少し遠方であるということもございまして、今回オンラインでの参加とさせていただきます。

私、気仙沼で手編みの会社をやっておりますが、生まれ育ちは東京ですので、こういった東京都さんのプロジェクトに関わらせていただくことは大変うれしく思っております。

今やっている気仙沼ニットイングという会社は、震災をきっかけに立ち上げておりますが、もともと港町で漁師さんたちがロープワークといったことの延長で編み物をよくされていて、手編みの文化がこちらにございましたので、震災後、地域の人たちが誇りを持てる手仕事をつくらうということで、デザイナーさんなどにも入っていただいて、産業化して、もうすぐで10年になります。

地元の人たちが手編みするニットを、クオリティーの高いものにして、ブランディングし、お客様にお届けするという事業をやっております。

今回、江戸の伝統、東京に根づいた伝統をこれからブランディングして、海外にも知っていただくというプロジェクトに関わらせていただけることを大変うれしく思っております。

私、気仙沼に来る前は、ブータンという国で首相フェローというポジションで仕事をして、観光育成などをしていたのですが、ブータンという国では、いまだにみんな、正装は民族衣装を着用することになっています。日本で言うところの着物みたいな衣装です。今日のような会議の場ですと、みんな伝統の民族衣装を着ていて、一方で、手にはiPhoneの最新版を持っているというような国です。やはり伝統が続いていくには、単に補助金をつけてその技術を守ることではなくて、人の暮らしの中で使われていくということが一番なのかなと思っております。

また、私も職人である編み手と一緒に事業をやっているのですが、自分がつくったものが人に

喜ばれている、人の暮らしの中で生きているということを知れるということが、職人にとってはなにより心の支えになると思います。

単に先代から受け継いだ技術なので磨いていかなければいけない、続けていかななくてはならないというだけではなくて、自分のやっている仕事人が人に喜ばれていると実感できることは非常に大事なことです。そうやって伝統文化が暮らしの中に根づいて広がっていくような、そういったチャレンジができるように私も貢献できたらと思っております。よろしくお願いいたします。

【大洞委員長】

そのあたりはまた後ほどお話いただければと思います。ありがとうございます。

それでは、議題に入りたいと思います。今日は「新しい時代に向けた今後の展開」についての議論ということになります。

前は昨年10月だったのですが、そこで開催した委員会では、新型コロナウイルスの影響下での本プロジェクトの役割などを議論してまいりました。

その後もコロナとの闘いが続いて、言ってみれば我々は新しい時代に入ったと、これをウィズコロナと言うのか、ポストコロナと言うのか、いろいろ言い方はあるかと思いますが、恐らく元の時代にはなかなか戻らないと。

そして経済再生に向けた再スタートも切ろうとしている今、このきりぎりプロジェクトも新しい価値観の下に、プロジェクトを今後どのように飛躍させていったらよいか焦点になると思います。

そういう視点から議論できればと思っておりますが、まず事務局から説明をお願いして、その後、議論に入りたいと思います。事務局の方、よろしくお願いいたします。

【勝見部長】

それではまず、事務局から「新しい時代に向けた今後の展開」につきまして御説明いたします。

まず前半は、プロジェクト開始から約5年間のこれまでの歩みでございます。

これまでに衣食住を彩る東京の宝として22のモデル事業者を選定しています。

モデル事業者の皆様は、昨年からのコロナ禍でも工夫を凝らして積極的な発信をされていますが、御覧の資料では、その一部を御紹介しています。左上が組みひもをインテリア、店舗のファザードに仕上げたもの、右下では、江戸木版画で、月岡芳年の月百姿を復刻し、英国向けウェビナーで紹介した例などを御紹介しています。このウェビナーには500名以上の方の御参加がありました。

6ページでは、コロナ前に国内外で展開したプロモーションを御紹介しています。

7ページでは、昨年度からの感染症状況下でのプロモーション展開を御紹介しています。左上ですが、オンラインで展覧会イベントを実施しまして、江戸東京シンク展として館鼻委員にディレクションいただき、オンライン開催いたしました。左下では、SNSや雑誌での発信を御紹介しています。真ん中の写真、飛行機の機内誌については、ちょうどこの夏の東京2020大会の機会を捉えた東京特集で、きりぎりプロジェクトの3事業者様を機内誌で御紹介いただいたものでございます。

8ページでは、昨年度の委員会での委員の皆様からの御意見、御議論を踏まえ整理したこのプロジェクトの意義を、エコ・アート・伝統が織りなす豊かな衣食住の提案など3点掲げております。こうしたプロジェクトの意義を事務局としても改めて強く意識して事業を進めているところでございます。

9ページからは後半、これまでを踏まえた上での今後の展開についてですが、まず今後の展開については、「伝統と革新」のメッセージをさらに強力に発信し、オンラインの経験も踏まえつつ、感染防止対策の徹底を前提として、リアルの体験も取り入れたいと考えております。

本年度後半のプロジェクト展開の柱、1点目がブランド力の向上です。年明け2月から3月にかけて、現代アートと伝統産業による新たな価値を発信する展覧会イベントを都立旧岩崎邸庭園を会場に実施しようと、現在、必要な契約手続を進めております。こうした展覧会イベントの開催などにより、プロジェクトとしてブランド力の向上を図った上で、さらなるビジネスにもつなげていければと考えています。

2点目の柱が海外に向けたプロモーション展開です。本年8月、デザイン・工芸という1項目を新たに加えて、知事とパリ市長との共同宣言が締結されました。共同宣言を受け、パリ市のインキュベーション施設、アトリエ・ド・パリのデザイナーとモデル事業者6社の方の共同制作プロジェクトを

開始しております。現在、リモートを活用した共同制作を進めております。この共同制作の成果発表と、パリ市との交流連携事業の今後の今後の展開について検討しているところでございます。

最後に令和3年度、今年度1年間の取組を整理しております。表の上段、モデル事業者は、今年度も新たに追加すべく、先月29日まで募集をしました。応募いただいた中から12月に向け選定を進めることとしております。

事務局からは以上でございます。

【大洞委員長】

ありがとうございました。ざっとの説明で、いろいろなものが入っているので、お分かりにくいところもあるかもしれませんが、まず基本的に、今後進めていく上でのコンセプトとして「伝統と革新」というメッセージを強く打ち出したいということ、それからもう1つ、オンラインの仕組みを継続しながら、今後リアルの体験も入れて取り組んでいきたいよねという話、それから、具体的に今後の取組の1つとして、パリ市との共同のプロジェクトとか、そういうお話をさしあげたわけですが、まず今後の展開に当たってのコンセプトと展覧会イベントの開催について御意見を——今日、前半は、ちょっといつものスタイルと違って、私から幾つかテーマを絞った上で、それぞれ何人かの委員の方々に問いかけをさせていただく形で進めたいと思っております。最後のほうで時間の許す限り、今度全般を振り返って、今後について自由に意見をいただく時間も取りたいとは思っております。

本日は時間が限られている中で、多数の委員に御参加いただいておりますので、御発言をできる限り簡潔に、手短にお願ひできればと思います。1分ぐらいが1つめどではないかと考えております。

では、一番最初ですが、そもそものこの今後のコンセプトということについて、まさにブランドの専門家でもられる山田委員から一言まずいただいで出発したいと思うのですが、お願いできますでしょうか。

【山田委員】

分かりました、1分ですね、かなり厳しいですね。

皆さん、よろしくお願ひいたします。グラムコの山田と申します。ブランディングをやっている会社ですので、ブランドの専門家ということになります、その観点から、このプロジェクトは、1回目から入らせて戴いています。ちょっと第1回を振り返って見たら、2016年、平成28年の12月5日に初回の委員会を行っております。

そのときに、もう委員にはいらっしやらないのですが、当時のシャネル日本の社長、今は会長でいらっしやるかな、リシャール・コラスさんもいらっしやって、その方も交えてコルベール委員会の話をしたのです。要はフランスにはコルベール委員会という委員会があつて、多くの有名ブランドが集まって、ブランドの行く末をいろいろと議論したりする。その中でお互いを高め合うような活動をやっているのだという話を聞きました。小池知事は、それを日本でもやりたいのだというお考えを強くお持ちになっておられ、ただそれを完全に再現することではなくて、インバウンドの人たちによいもの、日本のよさを知っていただく、あるいは東京都民の皆さんに、この東京が持っている本来の力、伝統の力、それを新しくしていく革新の力を知ってもらいたいということにちょっと転換して広げていこう、というようなお話をされたことを記憶しております。

この間、このプロジェクトもかなり進化してきたと思うのです。まずインバウンドをターゲットにするということは、この状況下で非常に難しいのですが、当初は考えていなかったアウトバウンド、アウトリーチをどんどんやっていったということが、すばらしい結果を生んでいると思いますし、これがパリとの提携ですか、そこにつながっていると思います。

さらに、よいものが分かる東京都民へということも、当初からターゲットに含めていたのですが、とりわけ、前回は申し上げたかもしれませんが、Z世代あるいはY世代の後半層に対してもリーチができるようなコミュニケーション、もちろん婦人画報の読者は非常に重要ですので、これは一番かもしれませんが、もっと若い方にもちゃんと知ってもらおうと。

そして日本のというか東京の若い人たち、結構和食が大好きです。これは本当ですよ。お店には若いお客さんが多いでしょう。和食を通して器を美しいと感じるようになってくるということで、若い方々の気持ちも変わってきている。そこをうまく突いていくと言いますか、ターゲットングをしていくことで、デジタルもリアルも活用しながら、本当の意味での日本のアール・ド・ヴィーヴルと、

キュージーヌ・トラディショナルをしっかりと伝えていくということが今後の引き継ぎの使命ではないかなと思っております。

すみません、2分もオーバーしたかな、ごめんなさい。

【大洞委員長】

よろしいですか、ありがとうございます。足りなければ、また後のほうでよろしく申し上げます。

それから、まず、セーラ委員に伺いたいのですが、先ほども控室で江戸きらりのいろいろな作品を見ていただいて、率直にどのように思われるかなというところをぜひ伺えればと思います。

【カミングス委員】

まず、今日、長野からやって参りまして、セーラと申しますが、サラとも呼べます。保科に住んでいて、今日、更科のおそばをつくっている方もいて、何かそばにやってきたのだなという感じもします。

そして、いろいろな古くから伝わるよいものがある。昔、北斎が髪の毛を4つに割ることができたぐらい目と手が器用だった話を聞いて、今日もはさみをつくっている人もいらっしやっているから、きっとその会社がつくった道具を使っていたのではないかなとか思いながら見ました。

また、今、藍染めだとか、着るものもすごく好きですし、子供が日本舞踊を教わっているのですが、着物も好きですし、昔の布だとかは、かなり捨てられてしまっていることもあるし、地方には日本の文化が一番色濃く残っているにもかかわらず、危機一髪するときでもあるような感じがしますので、新しいものもつくりつつ、古いものも捨てず、再利用法を皆で力を合わせて頑張っていけたらいいなと思います。

【大洞委員長】

ありがとうございます。そうですね、古いままでは、きっと誰も使ってくれないし、新しいものにしていかなければいけないのだと思います。

【カミングス委員】

あと、木とかがぱっきり切られてしまったりとか、もっと緑も大事にしていきたいと思います。

【大洞委員長】

はい、ありがとうございます。

それと、もう1つ先ほどちょっとお話があった展覧会、これは何ページでしたか、今後リアルを考えていきたい展覧会、このイベントの話もございますが、そもそもこれは今年の3月にも館鼻さんが総監修、総監督、御自分でしゃべっていただいたり、いろいろな方の御指導もいただいたというリシンク展をやられていて、その御経験もぜひ、そこでどういうことを感じられたかのお話も伺いたいと思います。よろしく申し上げます。

【館鼻委員】

館鼻です、よろしく申し上げます。

昨年度、3月から約半年間ほどオンラインで開催しておりました江戸東京リシンク展ですが、東京都内のユニークベニユを活用するというのも仕様にあり、目白にある和敬塾 旧細川侯爵邸を活用し、実際に作品や歴史資料などを展示して写真や映像などに記録したもので展開していきました。

まさに展覧会のテーマとなる「伝統と革新」を体現する内容なのですが、僕自身は展覧会ディレクターとして監修すると同時に、僕自身もプレーヤーとして参加しておりまして、作家・館鼻とモデル事業者の方々とのコラボレーションの作品、そのような展示物に加えて、伝統産業事業者の方々の方々の今までの変遷をたどるような貴重な歴史資料を併せて展示しました。

伝統産業事業者の方々とのコラボレーションの作品については、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館にも永久収蔵されることが決まりまして、大きな成果を上げた実感しております。

また、その英国の美術館担当のキュレーターの方に実際にお越しいたごいで、携わっていただいたその事業者の方々の方々の工房を見学したり、実際に声を聞いていただいたということも大きな経験になっ

たかなと感じております。

また、参加してくださった事業者の方々を中心に、このようなブランドブック、広報ツールを作成いたしました。展覧会の様子や参加してくださったモデル事業者の方々の工房での製作の様子などを収めています。こちらはバイリンガルで製作しているのですが、海外への発信も視野に入れて活用すべく製作をしたものになっております。

また、先立ってお伝えしたヴィクトリア・アンド・アルバート博物館では、作品の収蔵と連動するような形で、博物館内にあります英国ナショナル・アート・ライブラリーにも、本書を収蔵していただいて、海外においても日本の伝統産業の現代の形を残す資料として評価いただいております。

これからのお話ですが、昨年度はオンラインでの開催が主となって、例えば美術大学生向けのワークショップなどもオンラインで開催したのですが、やはりこれからは、実際にその職人さんの手仕事もそうですし、歴史資料もそうですが、リアルに目の前で御覧いただきたいなと思っておりますので、個人的には、そのような形でリアルでのイベントを推進していけるとよいかと思っております。

【大洞委員長】

ありがとうございます。皆さん短くまとめていただいているありがたいのですが、さっき1分と申し上げまして、1分と言ったら2分ぐらいに収まるかなと思いつつやっておりますが……。

今の館鼻さんの取組も含めて、すみません、間宮さん、もしよろしければ、こういう取組について今後どのように進めていくかについての何か御意見があればお願いいたします。

【間宮委員】

ありがとうございます。私はまた3点、毎回3点ですが、1分以内に。

まず1点、海外を見ていると、このコロナ後の動きはめちゃくちゃ速いんですね。日本国内で関心があるところと全く違うスピード感でビジネスが再開されたり、トラブルが起きたり、あれは原油とか需給ギャップですよ。コロナから立ち上がる一方で、供給が追いついていないと。

そういった状況を踏まえると、我々も「様子を見ながら」ではなくて、とにかく速くやる。コロナから、ある程度、先ほど委員長もおっしゃった、コロナ前には戻らないけれども、コロナが落ち着いた前提を踏まえながらも、速く準備してやるということがまず1点。

それから2点目に、改めて今日集まって、私どもは実感しましたし、このリアルの会は、やはりいいですよ。大体ここも地方創生とか政府でクールジャパンをやっているときに、女性の皆さんも含めて、接点があった方が非常に多くて、改めて、やはりリアルの会がいいなと思ったのですが、今ニーズというのは、このリアルに対して飢餓感みたいなものを生じているような状況で、ぜひ先ほどのこのリアルなイベント、ぜひリスクを取ってでもやったほうがよい、そして肌感覚で感じてもらったほうがよいということが2点目。

それから最後の3点目ですが、改めて、先ほど山田委員からもありましたが、このきらりの本旨に立ち直って、参加している皆さんの連携強化とか、あるいは、きらりの外でも、例えば今回の旧岩崎邸もそうですが、文化的付加価値というのですか、そういう値打ちを持っているところと連携することによって、改めて連携を強化して、コラボの相乗効果を上げるべきではないか。

あと、これはちょっと余計なことを言うと事務方に迷惑がかかるけれども、例えば今、東京国際映画祭をやっていますよね。国もお金を出しているけれども、今は都庁が主役になっていまして、例えばそういうところも、またよい機会になるのかもしれないとか、そういった、きらりの内外での連携強化を、このリアルイベントをやるに当たっても、ぜひ改めて進めるべきではないかと思っております。

以上です。

【大洞委員長】

ありがとうございます。速く進めたいですね。

すみません、急に振って申しわけない、富川さんにちょっと伺いたかったのですが、まさに、ある意味マーケット側の代表というか、まさに代理人のようなお仕事もされている中で、今までのお話をどう思われたか、御感想を伺えればと思うのですが……。

【富川委員】

1つは、コロナという状況の中で、消費する対象がすごく限られてしまっている今、逆にこういう貴重な技術売り込みどきではないかということ非常に思いますので、ぜひその辺をアピールすべきではないかと持っています。

そして、先ほどもリアルイベントのお話がありましたが、やはり伝統的な技術の伝承は、見て、感じて、あるいは自分でも触ってみてというような体験が非常に重要だと思いますので、私もよく組みひも教室などに行って、すごく夢中になってやりましたが、そういうことを感じる場を、大人数ではなくて、もっと小さな場で何回もやるみたいなことがあったらよいのではないかなと思います。

そしてまた、Z世代に対してですが、やはりデジタル情報でも情報入手が基本ですので、彼らについては、もっと頻繁にデジタル上での情報発信を、とにかくあふれていますので、どんどん流れていってしまいますから、何かそこで面白いことを発信することが必要なのではないかなと思います。

【大洞委員長】

どうもありがとうございます。

もう1つは、先ほどもお話がありましたが、海外に向けたプロモーション展開というところで、ここでは特にフランス・パリとの共同宣言等のお話がありました。これまでもパリでの取組が行われていて、齋藤さんには随分いろいろと御協力をいただいたということだと思うのですが、これまでを振り返って、齋藤委員から今後の展開に向けての何かアドバイスがあれば、ぜひ一言いただければと思います。

【齋藤委員】

齋藤でございます。よろしくお願いたします。先ほど間宮さんのお話にもありましたが、確かに今、こういう状況の中で、海外で今のように進んでいるのかはすごく重要なポイントだとも思うのですが、私自身、一応フランスに居住しているもので、こここのところはずっと日本に、かなり避難しているような感じなのですが、それでも今年4回か5回パリに往復しています。こう申し上げると何か危険な人物と思われるかもしれませんが、でもPCR検査だけでもう20回近くやっていますので、その辺はぜひ御安心いただきたいと思うのですが、そこで一番感じるのが、やはりおっしゃったように、フランスなどは、もうコロナの最中から、サステナブル・リカバリーという言葉とグリーン・リカバリーという言葉がもう普通に使われていて、今回この資料の中に、今回のプロジェクトの意義という中で、サステナブル・リカバリーという言葉が出ていることは、すごく大事なことだと思っています。

ですから、そういう中から、今の我々のプロジェクトが次の時代に向かうに当たって非常に重要な点が、これがまさにサステナブルなことをやろうとしているということなので、フランスでもそういう面ではすごくきちっと理解されるのかなと思っています。

既に何回かフランスでイベントをやったり、展示会にも出しましたが、特に東京都はこのところ、小池さんのイニシアチブもあって、風呂敷の展覧会をパリでやったり、展示会にも出したり、それからオリンピックも次はパリということで、東京とパリはすごくつながっているし、今回こうして東京とパリの正式な意味での提携が行われたということは、我々プロジェクトを推進する委員の皆さんにとっても非常に追い風になっているのかなと。ですから、これはすごいチャンスだなと思っています。

来年冬に、1月にもパリの展示会、メゾン・エ・オブジェに今回プロジェクトを出すのですが、ちょっと1つだけ御紹介しておきますが、実は去年、ある京都の漆工芸の会社があったのですが、去年の夏頃ですかね、もうその会社が廃業する、もう商売がコロナ禍で、それこそ高級なレストランに漆のテーブルを納めたりしていたのですが、そういうことも成り立たなくなって、後継者もないし、もう廃業するというで話を聞いていたのですが、突然ある人からすごく勧められて、「とにかく1回、もう最後だから、やめる前にパリの展示会に出したらどうか」と言われて、その人は、どうせ廃業するなら、最後でやってみようという形で、パリに行って展示会に出したんですね。

そうしましたら、何と、ぶらりと入ってきたロシア人が、その漆の工芸をすごく気に入りまして、自分の別荘の壁を全部それでやると言い出して、それで「えっ？」と、まあ、半分、そんなのは信じなかったみたいなのですが、次の日にその富豪のロシア人が使っている建築家の人が来て、商談に入って、実際にそれをやるということになったのです。

そうしたら今度は、廃業しようとして、もう職人もだんだん整理している中で、今度は手が足りなくなってしまうと、最初はこれではできないなど。というのも、これをやり始めたら1年間その人のためにしか仕事ができないということになったのですが、でも何とか、「納期はすぐかかるけれども、それでもよかったらやりましょう」ということで、今は廃業どころか、今度はもうかり過ぎてしまって大変というところになっているのですが、そういう話を聞いて、世界は広いなど。

ただし、それはもう本当にラッキーな話なのですが、1回行ったからといって、そういう大富豪に巡り会えるかどうか分かりませんが、東京江戸きらりは既に数年、毎年何らかの形でパリに関与していますので、これを何度も継続をしていくことが実際の結果につながっていくのかなと思っていますので、これからもぜひ期待していきたいと思っています。

【大洞委員長】

前向きに捉えたら、何かフレンチドリームが実現するかもしれないということ。

特にこういう海外向けのプロジェクトや、実際にデザイナーと一緒にやっていくというこういうやり方について、すみません、西浦委員には、恐らく海外から見たときに、こういう取組がどのように見えるかという点も含めて、何かアドバイスがあればぜひ一言お願いをしたいと思います。

【西浦委員】

実は、この委員会委員を拝命した際、今までの歩みという資料を見せて頂きました。「婦人画報」に掲載された記事をはじめいろいろ拝見していきながら驚いたことは、すでに完璧と言えるレベルで大変ポジティブな展開を成就されていたということです。正直、嬉しいサプライズでした。過去の様々な委員経験の中では、「いや、もう困っているんですよ」、「どうにかありませんかね」といったふうに、初段階からのスタートを期待されるものも少なからずだったからです。

委員にお誘いいただいた理由が明確になるよう、私の活動を少々紹介させていただければと思います。複数ございますが、主な収入源は創業30年を迎えました国際・総合コンサルタント会社になります。大学教授は、学生たちとの交流が楽しいのと、世界で得た経験や培ってきたものを継承していきたいという気持ちからですから、他のオピニオンリーダーとしての執筆、講演活動なども、会社経営とは別なわけです。コンサルティングと一口に申ししましても、ヒアリングとアドバイス、アイデアやソリューションの提案提供のみの場合もあれば、契約企業さんの事業の依頼部分をアウトソーシングされて一緒に推進していく踏み込んだ形もございます。新規事業の場合は指導を担う場合もございますし、単に広報宣伝啓蒙発信係に徹する場合もあります。ですので、常に何歩も先にまわって助言するための発想が求められるため、自分なりに視野を広げて様々な分野の勉強、研究を続けています。

「江戸東京きらり」さんの積み重ねを拝見したとき、批判ができないほど全ての要素を網羅してポジティブ展開をしていらっしゃるだったので、更に戦略に磨きを掛けなければならないと、身が引き締まりました。事前の打合せでも、勝見部長にざっくばらんに申しあげたとおりです。ちょっと悔しいくらいでしたが正直に申しました。

私の強みは、情報力という意味で1日に100通ぐらいのメールが世界中、様々なお国から送られてきます。世界中の主要メディアに働いている方々、家族ぐるみの付き合いもあれば、個人ビジネススペースの付き合いもあり多岐にわたっています。それらの方々は各国の富裕層、アーティスト、様々なジャンルです。長くやっていますので、信頼に基づいた親交、素晴らしい人脈に恵まれ、ただただ感謝のひとことなのです。そうした方々からいろいろな意見、厳しい批判、役立ち情報が入るわけです。大いに助けられています。

こうした交流の中で、草分け的に私の人脈範囲になりますが、いろいろなことを日本のために発信してまいりました。ジャパンパブリックディプロマシーを常に意識して影響力のある人たちに説得力をもって広めていく運動を、ここでも続けていきたいと思ったことが1つ。

それから、小池都知事の良きお手本を真似させていただくことも大事かしらと。お隣の富永愛さんもそうですが、婦人画報誌面でも自ら江戸工芸品を身につけてステキに披露していらっしゃるね。そうすると、「あら、私もこういうのを買おうかしら」といった気持ちになる方は多いと思います。今日、私も江戸小紋を着てまいりましたが、洋服仕立てです。今日、サラッとお洒落に和服を着こなしていらっしゃる富川委員に、いつか帯の結び方を教えていただいて、和服もちゃんとひとりで着られるようになりたいと思います。和を日常に取り入れる小さな個人の行動が大きなムーブメン

トに繋がるはずですから、努力、研鑽を続けていきたいと思います。

海外の方々には、日本の伝統文化、伝統工芸、そういったことにたいへん興味を持ってくれます。まさに、メイドイントーキョー・シンス・エドですね。更に関心を抱いていただくためにも、大切なことは今、山田委員が御指摘になった、「新しくしていく」ということ、そこがすごく求められていると思うのです。そういう意味では、ここにお集まりの委員の方々を取組を拝見して、「まさにこれだわ」という、まさに手に取るように理解を深めました。ぜひ、継続していただけたらと思います。

やはり、伝統の中の中から生まれてくる新しいものというのは、私が育ったイギリスでも、強く根付いていて、それこそが世界をリードしているのです。同じ事がまさしく東京にもあると確信します。

【大洞委員長】

ありがとうございます、いろいろポジティブな御意見をいただいて、ありがたく思います。

今ちょっとその乗りではないですが、富永さんにとっておるのですが、まさに価値をどうやって伝えていくか、まさにそのブランドを伝えることもずっとやっていらした富永さんから見られて、今日のお話を聞かれて、実際にああいういろいろな作品を見られて、どういう印象を受けられたか、ちょっと教えていただいてよろしいでしょうか。

【富永委員】

ありがとうございます。そうですね、私はお洋服を着て、その価値を皆さんに伝えていくという職業ですが、先ほど待合室でいろいろ企業の方たちの作品を拝見させていただきました。本当に素晴らしいものばかりで、長年続く技術が、目で見て分かるすばらしさがありました。

この技術に関しては、本当にもう文句のつけどころというか、当たり前ですが、何にも言うことはないと思うのですが、フランスにおいては、先ほどお話がありました日本の伝統の展覧会、いろいろ開催されているものを、私もパリに住んでいるときに見ていましたが、やはり海外だと、日本の文化、伝統に関しての関心があることはすごく分かるのですが、やはり日本の中において、どのようにこの価値を伝えていくかが課題なのだろうなということは感じることがあります。

私のようなモデルというかキャラクターが立つことによって伝えられることもありますし、また、先ほどのお話にもありましたZ世代に向けてデジタルを強化することによって若い世代に伝えることができることもあります。

また、こんなにすばらしい文化を伝えていかなければいけないと非常に思っておりまして、それはリアルなイベントを、小さい規模でも、先ほどお話がありました、いろいろなところで開催していくということがよいことにつながると思います。

あとは、このコロナの中で、日本各地に行くことが多くありまして、地方でいろいろな文化が、それは世界の中でも極まれだと思っておりますが、日本というのは、いろいろな各地で文化が育っている、特殊な、ユニークな価値が育っている、群馬のお話もありましたので、何かそこを、コラボのような形で、間宮さんもおっしゃっていましたが、江戸東京きりぎりプロジェクトが先導して、日本の地方の伝統文化の人たちを率いていくみたいな形もありですし、それが一丸となると、どれだけ大きな力になるのかと、思います。

そして、いろいろなイベントがこれから、復活してくると思いますが、やることによって、やはり人の目を引きましますから。

あと、やはりデジタルでどれだけ発信していくかということなのではないかなと。もちろん私が着物を着てインスタに上げるというような、そういったいろいろな施策があると思います。

本当にやっていることは素晴らしいことだと思いますので、皆さん考えていらっしゃると思いますが、どれだけ広げるかということだと思います。

ありがとうございます。

【大洞委員長】

ありがとうございます。もう皆さん、背中を押していただくお話ばかりで、大変感謝しております。

すみません、御手洗さんにちょっと伺いたいことがあったのですが、お待たせいたしました。と言いながら簡単にお答えいただければありがたいのですが、多分、気仙沼ニッティングでも、マーケットというか、お客さんと対話しながらいろいろな事を進めていくということを生懸命やられているの

ではないかと思うのですが、そこら辺の観点も含めて「こういうことをしたら」みたいなアドバイス、アイデア、もし何かあれば、ぜひお願いをします。

【御手洗委員】

ありがとうございます。私も、リアルなイベントを何度もということも、もちろんすばらしいことだと思うのですが、やはりオンラインの活用、それも単に発信ということではなくて、双方向でコミュニケーションできるような機会をつくっていくということも大事なのではないかと思っています。

先ほどZ世代、Y世代後半というお話もあったかと思うのですが、若い人だと、やはりインスタなどを見て、感じのよい服とか好きなものを見つけると、そこからオンラインストアに飛んで購入するといった動きにも慣れていないのではないかと思います。

ですので、リアルなイベントはもちろんのこと、職人さんが何かつくっているようなところとかを、例えばインスタとかで見られるとか、場合によってはお話を聞ける、質問ができるといった機会もどんどんつくるとよいのかなと思っています。

私自身、子供がいるのですが、ネットで子供服を見ていてたまたま気に入ったものがイギリスの会社のもので、日本語のオンラインストアで注文すると、送料450円でイギリスから気仙沼まで届きます。好きなものは世界中のどこからでも見られるし、取り寄せられるということが今という時代なのかと思います。

特にインバウンドはしばらく戻らないと思いますし、オンラインでの発信、そこからまた購入にもつなげられるということができるとよいのかなと思います。

すみません、少しずれてしまったかもしれないのですが……。

【大洞委員長】

いいえ、とんでもないです、どうもありがとうございます。

これで、いろいろと今御意見を伺った中で、いや、もう少し何か、特に今回から御参加された方々から御批判も受けるのではないかと思って覚悟はしていたのですが、前向きなお話を多く伺って大変ありがたく思います。

今までのお話を伺って、生駒さん、いかがですか。突然振ってしまって、すみません。

【生駒委員】

私も実はこの4年ほど、江戸東京きらりに関わらせていただいて、皆さんの御意見、もう本当に全部刺激的で、全部取り込んで江戸東京きらりを成長させていきたいと思っているのですが、コロナ禍を経て、人々が新しい価値観を求める時代に入ったかなと、今お話を聞いていても思います。単に新しいもの、オリジナルなものではなくて、物語があるものとか、本物がとか、その時代に江戸東京きらりでつくられているものは、最適なものだと思うのですね。皆さんの心や魂に訴えるものがあるのではないかと。

なので、これからの開発事業、あるいはPRをしていくときには、館鼻さんのなさった、まさしくあの展示会がお手本だと思うのですが、クリエイティブの力で化学反応を起こしていっていきとよいかなと思っています。建築であるとか、アートであるとか、テクノロジー、ITのいろいろな分野と、この伝統産業のジャンルが出会って、新しい価値観が宿ったもの、ことを生み出すようなことがたくさん起こればよいと思いました。

プラス、子供たちにぜひこの江戸東京きらりを体験してもらいたいと思いました。次世代につないでいく、Z世代のさらに次世代をつないでいくために、例えば工房、社会科見学は工房に行こうとか、実際に手で触ってみよう、つくってみようみたいな形で、小学校、中学校のお子さんから、この江戸東京きらりを体感していただくことができればよいかなと感じました。

以上です。

【大洞委員長】

どうもありがとうございます。

すみません、時間も大分迫ってきてしまったのですが、まだお話ししたい方がいらっしゃる、伺いたいこともございます。

大西委員、先ほども控室のほうでお話しした、若い人たちをどう巻き込んでいくかというような点について、ぜひ一言いただければと思います。

【大西委員】

大西でございます。では、一言だけ。

まず、この委員会ですが、今回新しくメンバーに加わった方を含めて、これからの多様性の時代に、まさしくこれだけのキャリアと、これだけの経歴と、これだけ多様性を背後に持った方たちが集まっている委員会はなかなかないのではないかと、これはすばらしいなと思います。

新しい時代への展開と言いますと、この新しい時代というのが3年後、5年後ではなくて、さっき間宮さんが、もう海外は変わっているとおっしゃっていましたが、もう来年、もうすぐ来るので、では、どうするのだという話で、江戸東京きらりがスタートして、これで5年たちましたので、そのタイミングを考えると、若い世代、これは年齢ということではないのですが、若い世代へどうやってこの江戸東京きらりのメッセージを伝えていくかということ。

そして、もう1つは、江戸東京のこの伝統技術に、物すごくそれを継承していこうとして頑張っている若い人たち、この人たちをいかに江戸東京きらりとして持ち上げていくか、メッセージを伝えていくかという観点からしますと、そろそろ選抜——従来の選抜の仕方と、従来の選抜のポイントは継続でよいと思うのですが、若い人たちに少しスポットを当てられるような、例えば別枠をつくって、伝統を一生懸命引き継いでやっている若い人、もの、ことを選抜すると。

もう1つは、江戸東京きらりとしてアワードみたいなものを設けて、若い人たちをクローズアップするというのを少し考えたほうがよいかと思います。

以上です。

【大洞委員長】

ありがとうございます。事業者の幅も広がってきて、このプロジェクトもそういう段階に入ってきたのかなという気もいたします。

堀井委員、江戸東京ブランド協会でしたか、そういうことが出てきたという御紹介をしていただくということがあったものですから、お願いできますか。

【堀井委員】

今、きらりプロジェクトのモデル事業者に入っていない人たちでも、例えば百貨店の催事とか、そちらのほうで結構連携をしながら活動している人たちが何件かいらっしゃるんですね。それがこちらと並行しながら、江戸東京ブランドをもうちょっとPRしていこうよというようなことで、今年に入ってそういう協議会を立ち上げてまして、今度、百貨店の1階を借りて、文化を語るような会をやっていこうというような活動をしているところです。

【大洞委員長】

また今度、前進したら、詳しく教えてください、よろしく申し上げます。

すみません、高津委員と宮本委員、矢崎委員と、あと数分しかなくなったのですが、いかがですか、高津委員から今日を振り返って、それから今後に向けてのアイデア、アドバイス等、何かあれば手短にお願いをいたします。

【高津委員】

にんべんの高津と申します。今日はありがとうございます。皆様、非常に前向きな話をして頂きました。今までやってきたことも凄く革新的でありますし、新しい取り組みが素晴らしいと思いました。

今日、お話を伺っている中で、どう伝えていくかが非常に問題なのではないかという意見が出ていたと思います。新しい人、Z世代の人たちにどう伝えていくか。伝わるためには、その人たちに必要でなければならない。ではZ世代が必要な伝統とは何だろうということ。少し伝統そのものの見え方を変えたらどうか、そのような事も必要なのではないか。リアル、オンラインも含めて、新しい技術を使いながら、変えながらやっていく。彼らにとっては伝統も全く新しいものだと思いますので、それが伝わるようにやっていけたら良いのではないのかなと思いました。

【大洞委員長】

ありがとうございます。まさに高津委員が御自分でやっつけていらっしゃることではないかと思ひます。では宮本委員、すみません、お願いします。

【宮本委員】

もう皆さん、すばらしい意見ばかりで、私が付け足すことはあまりないと思うのですが、展覧会の話で、前回はやったときにちょっと思っただけですが、これはリードタイムをなるべく長く取って準備をできると、もっとよいものになるのではないかと思うので、間宮さんも速くというお話をされていましたが、ぜひ今回、リードタイムをなるべくきちんと取ってできるというかなということ。

また、少人数で何回もやるということも、僕はすごく賛成なんですね。何が豊かかということが変わったという話で言えば、コロナ期間中、展覧会とか美術館とか、そういうところが全部予約制になって、かえってそのほうがすごくよく見ることができたり、楽しむことができるようになったと思うので、ぜひ江戸きりでも、そのように質感を伝えられるような展覧会ができるとよいのではないかと思ひました。

以上です。

【大洞委員長】

ありがとうございます。

すみません、矢崎さん、最後になってしまっ、切れ味鋭い矢崎さんに最後にコメントをよろしくお願いします。

【矢崎委員】

いえ、いえ。皆さん、本当に、いい意見ばかりで、私、付け足すことはございませぬが、やはり若い方に伝えていくということが一番大事で、あまり柔らかくして伝えるのではなく、がっつんと本物を、これなんだよと、これをちゃんときちっと見てちょうだいというような伝え方をしていったらよいと思ひます。

あとは、これから時代が2極化にどんでん返っていくとは思ひますが、あまりどっちつかずにならずに、やはりきり独自のきちとしたものを、どんと腰を据えてやっつけたほうがよいと思ひますね。なかなかブランド力とか伝統とかいろいろというものは時間がかかるものですが、あまり慌てず、しかしながら急いで、そして、やはり露出、富永さんがおっしゃったように、常にいろいろな発信をしながらやっっていくということが一番よろしいかと思ひます。

以上でございます。

【大洞委員長】

ありがとうございます。この委員会も13回ですが、これが二十何回になるのか、長生きしながらやっつけなければなと思ひております。

今日もいろいろと貴重な御意見、ありがとうございます。事務局を含めて、いただいた御意見を反映していただき、着実に進めていただければと思ひます。委員の皆様も、今日新しくジョインされた方々も、引き続き御支援、御協力いただければと思ひております。

では、連絡等、事務局から何かあればお願いします。

【勝見部長】

ありがとうございます。本日いただいた御意見を基に今年度の取組を進めてまいります。

次回の委員会開催は、来年2月頃を予定しておりますが、時期等は改めて御連絡させていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

以上です。

【大洞委員長】

ありがとうございます。以上をもちまして本日の委員会を終了いたします。せかしてしまっ、誠に

申し訳なかったのですが、いろいろ御熱心に御議論いただきまして大変ありがとうございました。議事の進行に御協力をいただきまして大変感謝しております。どうもありがとうございました。